



## 学問の世界へようこそ

国際基幹教育機構・准教授

谷口 栄一

### 学ぶことは楽しい

ドイツ人の大学生が *Lernen macht mir wirklich Spaß* (学ぶことが私にとって本当に楽しい。) と話すの聞いたことがあります。しかし「勉強が楽しい」というのは、日本ではなかなか口にしづらい表現なのではないでしょうか。そもそも「勉強」という言葉が「苦勞し、努力する」という禁欲的なニュアンスを帯び、「遊び」の対義語のように用いられているからです。私の経験でも、小学校や中学校の先生が「勉強が好きなんじゃないよね」と口にするのがありました。しかし、多くの人は「勉強」が嫌いだというのが事実だとしても、それは「学ぶこと」そのものが嫌いなのではなくて、テストの時間制限とか成績評価とかいった副次的な要素が嫌いなのではないかと思います。わが家の小2の息子を見ていて思うのですが、子供は好奇心の塊で、親にありとあらゆる質問を連発し、ある程度漢字が読めるようになってくると、図鑑や辞書を引き張り出してきて自分で調べるようになります。インターネットも使い始めます。決して学校でのよい点数(成績評価)をもらうためにやっているのではありません。学びは遊びの一部なんです。知りたい、つぎとめたい、「ためしてみたい」「何かができるようになるみたい」という好奇心や意欲は、人間ならば誰でも持っているものだと思えます。上述の副次的な要素、受験という制約があまりに大きいため、自覚できなくなっていたかも知れませんが、高校生になっても大学生になっても、こうした好奇心は決して衰えてはいないはず。皆さん

# Un roseau

No. 1

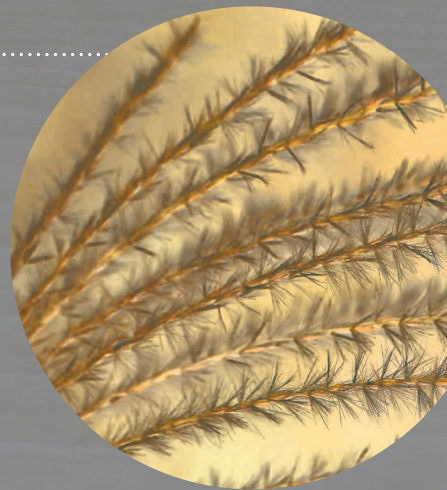
## タイトル“Un roseau (アン ロゾ)” —— 一本の葦 —— について

B.Pascal (1623-1662) は、一人一人の人間の存在を一本の葦に例えました。葦は河岸や湖岸などの水辺に生える、ススキに似た植物です。その存在は真にはかなく、人も同様で、その存在はきわめてはかないものであると…。しかし、Pascal は言うのです。

*L'homme n'est qu'un roseau, le plus faible de la nature, mais c'est un roseau pensant.*  
(ロム・ネ・カン・ロゾ、ル・プリユ・フェーブル・ドウ・ラ・ナテュール、メ・セタン・ロゾ・パンサン)

—— 人は一本の葦に過ぎない。自然界でもっとも弱いものだ。しかしそれは考える葦だ。——

人間は水辺の一本の葦のようにはかない存在ではあるのだが、考える(思考する、思想する)という行為によって有形の現象の世界(形而下の世界)のみならず、その奥にある広い広い世界(形而上の世界)を知ることができる存在なのだ。Un roseau とは「あなた」のことなのです。



## 新入生に

## 大学でどう学ぶか

工学研究科・高度人材育成推進センター

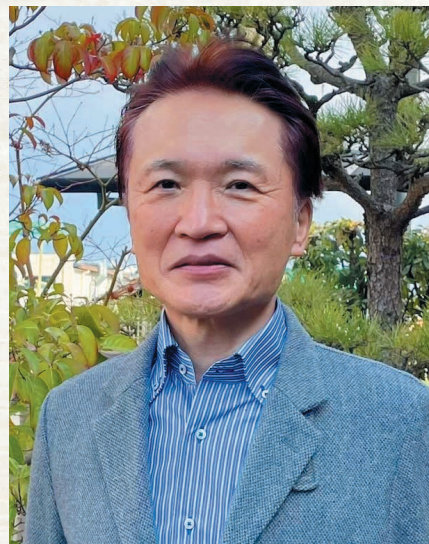
谷口 与史也

### シンプルに、でも深く考えよ

これは先日、学生の進路相談で起きたことです。堂々巡りに陥っている学生に向けて、思わず口をついて出た言葉です。口に出したものの何を言いたいかを自身でも整理する時間が必要でした。

### 大学にあるキャリアデザイン科目

ここで先ず、キャリアデザインという枠でお話ししたいと思います。大学院の全学共通科目で担当しているグローバル経営特論(学部・学域ではグローバル経営論)ですが、これはキャリアデザイン科目群のひとつで、物づくり全般、創業、金融、知財ベンチャーキャピタル、経営コンサルタント、大学などそれぞれの分野で有名な企業・組織で社長などの重積を担ってこられた講師陣より、自らの経験を土台として、グローバル経営の理論と実践について多角的かつ具体的に語っていただき、「志」の大切さに気づかせ、身を立て、人の役に立つことが生きた喜びに繋がることを伝えていただいています。将来、研究開発を通じてどのように社会に貢献していくかを考えさせることが目標です。実際には講師の学生時代からの人生体験を通して、得られた教訓や座右の銘などをお話しいただいてい



はこれまでの受験勉強の途中でも、「面白い、もつと学んでみたい」と感じる事柄にはしばしば出くわしたでしょうし、知的好奇心に駆られて、受験勉強を逸脱して専門的な書物を紐解いた経験もあるかもしれません。大学に入学し、受験時代と比べると、制約は著しく減少しました。まずは本来自分がもっていた知的好奇心に気づいてほしいと思います。「勉強」ではなく、自由な「学び」です。

## 学びの転換

大学合格までの皆さんがやってきた「勉強」は、どちらかといえば受動的な学びだと思えます。これまでは、「問題を解けるようにするための勉強」「問題集を解いて、解答で答え合わせをするような勉強」をする機会が多かったことでしょう。しかし、これから皆さんが入っていくようにしている学問というものは、本来、まだ見つかっていない答えを探索するものでもあり、また答えが一つに定まらないことも多々あります。常識を疑うことが必要な場合もあります。長い間「答え」だと信じられていたことが、実は間違っていたと判明するケースもあります。高校の教科書であつさり書かれていたことが、もしかしたら、将来の学問の発展によって、覆る可能性もあるのです。ひよつとして皆さん自身がそうした歴史的な発見に関与する可能性だって大いにあるのです。決して私は受験勉強が無意味なものだと言いたいわけではありません。受験勉強を通じて、皆さんは多くの科目を学び、たとえ断片的・表面的な理解にとどまっているとしても、大量の知識や情報を獲得してきました。これは深い学びへ進むための不可欠な前提となります。大学に入ってから最初のうちには、暗記が必要で勉強がたくさんあることも事実です。しかしながら、それだけでは真の学問の道に入っていくけません。能動的な学びが必要不可欠となります。好奇心が原動力となるわけですが、学問の世界に足を踏み入れるためには、一回生の段階で、知的生産のためのさまざまな方法（課題を自ら発見する。徹底的に情報を収集し、懐疑的・批判的に吟味する。論理的に思

考する。発表し、他者と議論する。自分の考えを再検討する）を身につける必要があります。本学で必修科目として開講されている「初年次ゼミナール」は、まさに学びの転換のための科目なのです。私自身も大学の新入生時代に、必修ではありませんでしたが、初年次ゼミに近い科目（ゼミ形式の教養科目）を受講しました。懸命に準備をして臨んだ口頭発表の席で、先生だけではなく、上級生や同級生からも辛辣な質問や容赦のない批判、適切な助言を受け、これが大学の学びなんだと実感したものです。

## 学問の多様性を知る

### 総合知への第一歩

皆さんは大きな総合大学で学ぶことになりました。ぜひともその利点を活かしてほしいと思います。まずは初年次ゼミをはじめとする授業やその他の活動において、できるかぎり自分とは異なる学部の学生と積極的に言葉を交わすようにしてください。また大学の教員はすべて何らかの研究者ですが、その研究内容はもちろん、学問観も人生観も実に多種多様です。教養科目を学ぶ大きな目的の一つは、学問の多様性を知ることにあります。自分の専門とは異なっている、面白そうな先生がいたら、(コロナ禍で研究室訪問は難しいでしょうが)メールなどで講義や研究の内容について質問してみてもいいでしょう。他の分野への関心を持つことが、本学が掲げるモットーの一つである総合知への第一歩だと思っております。

### 谷口 栄一(たにぐちえいち)

1965年生まれ

1991年京都大学大学院文学研究科博士後

期課程中途退学 京都大学文学修士

現職・国際基幹教育機構・准教授

専攻分野・近代ドイツ文学、比較文化社会論

担当科目・ヨーロッパの文学、比較文化社会論(同性恋愛の文化社会史)、ヨーロッパ文化史、ヨーロッパ事情、原書で読むドイツ文学、原書で

読むドイツ文化史、初年次ゼミナール(鉄道と文化・社会、初年次ゼミナール(ドイツの社会・文化・歴史)、ドイツ語

ます。通常は説教ばくるところですが、経営を実践したなかで体得されたもので、すのでも迫力があります。大阪公立大学になって、卒業要件に入らないこのような科目が多数ありますので、こちらにも是非目を向けてください。

## 志を持って

さて「志」という言葉が出てきました。専門家の解説を待った方がよいですが、Visionと考えています。初めて担当した時はSpiritと書いていたが、違いました。「青年よ大志を抱け」では、原文はbe ambitiousです。大志が近いようです。これ以上書くと恥ずかしいので、像などとなりませんが、それでは不足しています。そう、皆さんが友人と将来像を語るときに、単なる未来像ではない何か熱い思いが胸の中で沸々とすることはないでしょうか。それを加えるとVisionになるように思います。VisionのためにMissionはあります。

## むすび

さて、堂々巡りの学生に言いたかったことはこうではないかと思えます(未だモヤモヤしていますが)。「単純な命題であって良い、しかしそれに付いてはとことん考え抜け」ではなかったかと思えます。入学したばかりの皆さんを焦らせるような話ですが、人生は複雑、千差万別、それを設計するなんて「キャリアデザイン」はとても難しい、また難しい時代に入っていると思います。昭和時代では、十一年先輩の背中を追いかけるだけで十分でしたが、今やその背中はどこにも見当たりません。しかしグローバル経営特論の講師陣はそのような時こそチャンスが有るとも語っています。

大学は皆さんにとって何であるか、違うな・・・本当は何が望みなのか、どのように生きたいのか、どのように暮らした

いのか、もつとシンブルにどのようになりたいのか、などと自身の希望、欲望をシンブルなものに削ぎ落とすことで見えてくるものがあるのではないのでしょうか。深く考えよは、一つは時間を掛けよと言いたい。急ぎすぎないことです。時間をかけるということは自身の内なる反応を見極めるといことです。胸に沸る思いはつきりさせることではないでしょうか。哲学者でも心理学者でもないで適切な術語は見当たりにませんが、そのように感じます。学びへの思いや学び方のアドバイスとしては、大学で学ぶことはシンブルに考えれば良いと思います。皆さんのMissionです。そしてそのことを深く深く考えることがVisionにつながります。

## あとがき

縮めのあとに少し話がそれますがこんなことがあります。恩師からはとにかく深く考えることが大切と指導されましたが、大学院での研究で答えの見つからない問題に正に堂々巡りしていました。もう諦めた頃、夜床に着いていた時にアイデアが突然浮かんだ経験があります。浴槽を跨ぐ瞬間にアイデアが浮かんだというノーベル科学者も居ますね。創刊号にふさわしい学び方のアドバイスにはとうとう到達できませんでしたが、まだまだ未熟な私にはこの程度しかお伝えできません。キャンパスでお会いできる機会があれば、もつとお話ししたいと思います。

### 谷口 与史也(たにぐちよしや)

1960年生まれ

1993年大阪市立大学大学院工学研究科後

期博士課程修了 博士(工学)

現職・工学研究科・高度人材育成推進センター・

教授

専攻分野・建築学

担当科目・研究者の世界へ、コミュニティ防災、グローバル経営特論